

尾崎士郎 愛知二中学友会報寄稿文

都 築 久 義

愛知県立岡崎高等学校は、昨年（昭和六十一年）創立九十周年を迎え、同校の記念事業実行委員会は、卒業生である尾崎士郎の文学碑と校歌碑を校内に建て、『愛知二市岡崎高校九十年史』を編纂した。学校史編集委員会は、その資料として旧制中学時代に発行されていた学友会誌を集めたが、そのなかに尾崎士郎の在学中（明治四十三年四月から大正五年三月）に発行されたものが二冊あった。そこで編集委員会のご好意を得て、尾崎士郎の同誌への寄稿文を紹介するが、二冊のうち大正四年四月十二日発行の『学友 両公記念号』は、徳川家康・本多忠勝の三百年祭記念号であるため、通常の学友会誌ではない。また、同号はわたし自身もすでに入手していて、たびたび拙稿に引用してきたが、同号の「徳川家康公論」は、初見の学友会誌の尾崎の論文とも関連が深いので、ここに全文を再録し紹介して

おく。

初見の大正元年度の『学友会報』は、発行日が大正二年三月二十日、発行所は愛知県立第二中学校学友会となっている。巻頭に勅語を置き、次頁に綾部直熊会長（校長）、その後に第十三回卒業生、剣道部と柔道部の活動風景の写真が続く。本文は最初に校長の論説（「処世の要義」）、次に教員（三人）執筆の片玉欄、生徒の作占は雑輯・文苑・紀行・韻文欄に載り、校録・部録といった学校行事やクラブ活動記録も出ている。最後に十二頁にわたって明治天皇御製が掲げられているのが、時代の雰囲気を与える。なお、大正元年度は尾崎士郎にとっては第二学年である。明治四十三年四月の入学だから第三学年のはずであるが、入学した年は落第して進級できなかったために、翌四十四年に一年生をやり直している。本誌に登場する筆名は、本名の尾崎

士郎のほかに、尾崎士朗、尾崎四郎を使っているが理由はわからない。目次とも一致しているから誤植やミスではないと思われる。

尾崎士郎が同誌に寄稿しているのは、雑輯に「佛」、紀行に「浜名湖」、韻文に短歌・俳句各四首である。部録のうち学芸部の項目に、演説練習会の演題や大会の成績が載っているのが注目される。ちなみに第一期第一回（四月十八日、弁士四人）は、「光陰」、第二回（五月十三日）は「当日は弁士の出演頻る多く」とあって尾崎の名前はない。

第三回（五月二十三日、弁士十一名）は「剛健不屈の精神」、五月二十七日は海軍記念日の式典のあと春季大口演会が行われ、尾崎士郎は二等賞に入賞している。演題は第三回と同じものであった。第二学期も第一回練習会（十月三日、弁士十六名）や秋季大会（十一月二十七日）が行われたが、なぜか尾崎士郎の名前は見あたらない。ほかに大正元年度（大正二年一月十六日舉行）学芸競技会受賞者名簿にも、一、二年級作文科のところに二等賞、尾崎士郎・大須賀健治と出ている。この競技会は国語・漢文・習字・地理・幾何といった各教科目ごとに実施されたようだ。

さて、同誌の寄稿文の中で目を引くのは、雑輯欄の「佛」である。尾崎はナポレオンが「コルシカの一角に立つて、遙かの天を望んで嘆じ且罵つた声を聞いては只感慨無量！

英雄の末路が如何に悲惨であるかと云ふ事を思はせて、思はず知らず暗涙に咽ばしむる。実に英雄の末路は悲惨である」と書いていて、一方、第四学年の時の「徳川家康公論」でも「私情を以て論ずれば家康は、最も好まざる英雄なり。何となれば、其波瀾少き事に於て、其末路の悲惨ならざる事に於て、同情す可く欣慕す可き点の甚だ尠少なればなり」と述べているからである。つまり尾崎にとってナポレオンは、末路が悲惨であったが故に好ましい英雄であり、徳川家康は末路が悲惨ならざる事において、最も好まざる英雄"だったのだ。この英雄観というより人間観は、中学校の二年生の時も四年生の時も変わってはいなかっただけでなく、尾崎の生涯を通して一貫していた。

とくに尾崎士郎の家康嫌いは顕著で、戦後の山岡壮八の『徳川家康』がブームをよんだときも、家康嫌いの弁を雑誌に書いて水をさしたほどである。むしろ、彼の歴史小説のなかには家康を主人公にしたものはなく、最初に筆を執った歴史小説が、都新聞に連載した「石田三成」（昭和十三年）であったことに端的に現れていよう。「彼の生涯を探りて、革命的、反逆的の行為は毫も見出す能はず。然り。彼は熱血的英雄にはあらざりき。彼は詩的英雄にはあらざりき」が故に家康を好まなかった尾崎は、自らの生き方を革命的、反逆的行為に求め、熱血的、詩的情熱に身を焼や

し、文学においてもそういう人物と行動に興味を寄せて描き続けた。その意味で、ここに紹介する「倂」と「徳川家康公論」に、尾崎士郎の人間認識の原点がうかがえよう。

『学友会報』大正元年度

倂

尾崎士郎

日麗な春も一瞬の間に去り、新緑滴らんとする活きたる夏も夢の間に終局を告げたのである。

而して吾人が詩想を大ならしむ可く期待した秋も又吹き荒ぶ木枯と共に何處の国へか去てしまつたのである。

斯くして冬は来た。冬は再び循環り来つたのである。

余は飛び狂ふ地上の巴里字と降りみだるゝ雪の雄麗なる状―或は寒風枯木を麗はし壮烈な状―を眺めては、転た千古の英雄ナポレオンを想起する。

実にや彼は一代の英傑であつた。彼の吐く一語一句は、魔王の息と迄称せられて居た。以て彼が所謂行くとして可ならざるなき人物であつたと云ふことが覗ひ知れる。

彼の壮年時代の歴史は、真に吾々の如き功名心の勃々たる者をして思はず快哉を叫ばしむる。

併し乍ら彼がコルシカの一角に立つて、遙かの天を望んで嘆じ、且罵つた声を聞いては只感慨無量！英雄の末路は悲

慘である。

ナポレオンが天の一角を望んで叫んだ其声には、如何ばかり深い深い意味が籠つて居ただらうか。

彼の心情を解して、彼の為に悲痛の涙を振つた者が幾人ある事だらう。

嗚呼斯くして英雄ナポレオンは死んだのである―偉大なる盲想を理想化せんと胸中に悶えつゝ。

あゝ英雄の倂。

(「雑輯」)

浜名湖

尾崎士郎

吾れ昨夏東海道路道に乗りて鎌倉に遊びぬ。未だ初旅なる吾には、車窓より眺むる景色の変わり行くに、如何ばかり好奇心を大ならしめし事よ。

朝未だ暁近くなるに岡崎より乗り、東する程にいつしか蒲郡も過ぎ、御油も過ぎぬ。中間峻しき山あり。雄渾壮快を極むる海あり。平坦なる畑あり。一瞬する間に変わる景色の面白さは、又筆に盡す可くもあらざるや。やがて山盡き畑盡くれば、早くも前には渺々たる浜名の大湖見え初めぬ。蒲郡より此處に至れる間、白帆吹き満ちて一碧の海水暁光

を漂はし、無数の帆影の水平線を割るかと思えて、其中に
真白の帆は波に映じて眩ゆき様に光りぬ。

思へ満眼の氣象総て軟和にして、微風のそよとだにも吹く
としも覺えざるを。

日漸く登れば、新光浪と相映じ、亦美しさ目も醒むるばか
りなり。

見渡す限り総て是れ水、目に入るもの只白帆のみ。遙かに
見よ、水天一碧相接するの所に、怒濤逆巻きて頗る雄を極
むるを。

是れ浜名湖の水と太平洋の水と、相寄つては放れ、放れて
は寄る所、真や宇宙の偉觀と云ふべし。

静かなる天地を汽車は只一直線に走りつゝあり。

やがて舞阪附近に至れば、既に水無くしては村落散点の田
舎のみ。

今一度懐しき浜名湖をと、窓に倚れば微風あり、吾が頬を
かすめて吹きぬ。

(「紀行」)

短歌

尾崎 四郎

病院の窓辺に近く寄り沿ひて淋しく咲ける百合の花

秋の夕工場の汽笛淋しくも聞ゆる方を眺めてありぬ

人の顔つくづく見れば何となく悲しき事を思ふ此頃

窓押せば町並遠く見ゆる程柳に煙る春の雨かな

(「韻文」)

俳句

尾崎 士郎

秋の夜や三日月様に詩を吟ず

犬の吠ゆる声聞きて冬の夜は明けぬ

水を汲む人あり寒き霜の夜に

見上げれば天高きかな秋の朝

(「韻文」)

『学友』兩校記念号（大正四年四月発行）

徳川家康公論

第四学年 尾崎士郎

去年の夏の事なりき。

永き日の徒然なる儘に、我れ一日、郷村を距る約二里、海水浴場を以て聞えたる宮崎と言ふに遊びぬ。碧波浩蕩、洋々たる大海は渺茫として霞み渡り、其前面に浮びたる緑滴る如き鳥影を眺めたる時、我が胸間を掩ひし妄念は恰も快刀乱麻を断つが如くに、払去られ、神氣自ら清澄なるを覺えて、暫く自然の威力の大なるに感ぜずんばあらざりき。

然れども足一度浴場に入るに及び、此方の沙上、彼方の岩間に、幾多の青年男女が、醜態を盡し、聞くに堪えざる醜歌を唸りて、騒ぎ笑ふの状を眺めし時、先の爽気は何時しか去りて、悪感、妄念、交々起り、転々人事の無風流なるに感ぜずんばあらざりき。

人事の繁雜聞くに堪えず、乃ち、杖を握りて、高地を攀ち、幾度か倒れんとしつゝ、終に人跡絶えたる、山頂に登りぬ。眺むれば、赫々たる太陽は漸く西山に没せんとし、一望限りなき大海は、白鳥の飛ぶ事のみ徒らに旺にして暮色次第に水面を包み来れり。

我れこの大なる自然の雄姿を眺め、胸懐自ら爽然とし快亦

禁ずる能はず。

吾れは愴然として瞑想に耽りき。而して思ひぬ。

英雄の一生も亦彼の没せんとする太陽の如きものなるかな。僅かに、数尺の草蘆より身を起し、而も一度天下の人心を得る時は、或は革命の炬火となつて千載の宮殿を焼盡し、或は戦争の洪水と為て、万世の社稷をも押流す。英雄の事業、洵に太陽の出没に似たるものあるかなと。

英雄、時勢を生ずるか、時勢、英雄を造るか？ 史家に非る余輩、敢て是が解決を求むる事を為さざるも、英雄が時勢の建築者！ 歴史の創造者なる事は、何人も疑を容るゝの余地なかるべし。

余輩、此雄大なる光景を眺め、感慨眞に無量なりき。

而して、今絶世の英雄、時代の建設者、徳川家康の半面を論ずるに当り、此数行の感想を以て是が前提と為すもの、豈、故なしとせんや。

徳川家康の一生は眞に完全無欠なる英雄の一生なりき。彼の生涯を探りて、革命的、反逆的の行為は毫も見出す能はず。然り。彼は熱血的英雄にはあらざりき。彼は詩的英雄にはあらざりき。然りと雖も其堅実なる思想、遠大なる抱負、巧妙を極めたる政治は、亦以て彼の英雄的才幹を證するものたらざるうあらず。彼の一生が熱血的に非りしが故に彼は往々世の青年子弟の好まざる所となれり。彼が詩的

英雄たらざりしが故に、世人は屢々彼の偉大を語る事を忘れたりき。然れども、苟も人物を論評せんと欲する者は先づ其、感情的態度を去らざる可らず。余輩、年少常に功名に憧憬する者、私情を以て論ずれば家康は、最も好まざる英雄なり。何となれば、其波瀾少き事に於て、其末路の悲惨なるざる事に於て、同情す可く欣慕す可き点の甚だ尠少なればなり。然れども公平なる態度、評論家の態度を以て是を論ずる時は、最も偉大なる尊敬す可き偉人なり。蓋し、偉大なると、好まざるとは自ら大なる區別あればなり。

余は信ず。家康は上下三千年を通じて、我国の産みし英雄中、最も偉大なるものなりと。家康には我国民性を超越したる處あり。彼は、天才も風俗も、共に習て以て模範と爲すを得可き人物なり。然らば、如何なる点が、我国民性を超越したるか？是れ吾人の解かんと欲する問題なり。素より我国民性は時代に依りて多少の変動を生ずる事勿論なれど近代の歴史に依て考ふるに、国民一般を通じて、感情の発動余りに多く、又其行に疎くして、向上革新の念に乏しく、恒に旧態を持して動かざるは事実なり。而して斯る國民性中より、彼れ家康の如き人物を生じたるは一種の奇蹟と言はざる可らず。

彼は、遠大の志を以て容易に動かず。悠然と構えて小成を

誇らず。一步一步建設して、大成を期するは、古今東西其比を見ず。

彼に信長の覇氣なく、秀吉の雄略に乏しきは、彼の往々吾國民性の間に嫌はるゝ所以ならずんばあらず。

彼素より、機に臨んで立つ、投機的風雲児に非ず。然れども、腹に壯図あり、胸に才略あり、然も収めて容易に出さざる所は、亦其人物の豪宕なるが故なり。

徳川幕府三百年の大計は、彼の沈勇と壮志とに俟たずして誰かよく是を為さんや。

日本人は猥に人の毀誉に依りて志を変ず。是投機的分子の多きが故なり。

見よ、昨日は憲政擁護を呼びし者、今日は官僚の闕下に伏して哀を乞ふの状にあらずや。熱血的なるは善し、然れども、其中に大なる沈勇を潜めざる可らず。而して今後の社会は最も此種の人物を必要なりとす。

邦家の国務益々多端ならんとし、時に対支問題漸く紛糾を極めんとするの時、余輩は、現代社会に家康主義の人物少き事を嘆ずる事頗る切なり。

あゝ人の一生は重荷を負ふて遠路を行くに似たり。此の考を有する人にして始めて、国家の政治を任すを得可し。あはれ、家康去りて数千載！段戸は聳え、矢作は叫ぶも、三河の地依然として人なし矣。噫！